

第48回関東地区公立中学校 修学旅行研究発表会

研 究 紀 要

付 録

修学旅行実施に関する調査集計結果の分析と考察



期日：平成24年11月22日（木）

会場：ホテルブリランテ武蔵野

主 催

関東地区公立中学校修学旅行委員会
公益財団法人全国修学旅行研究協会

後 援

埼玉県・さいたま市・茨城県・栃木県・群馬県・千葉県・千葉市 各教育委員会
埼玉県・さいたま市・茨城県・栃木県・群馬県・千葉県・千葉市 各中学校長会

研究発表会の趣旨

修学旅行は近年、訪問地や体験の幅が広がり、その形態が多様になってきました。しかし、望ましい集団活動、個人的資質の向上、社会性の涵養、自主性・実践性の育成、人間としての生き方への志向といった“修学旅行の価値”は変わっていません。まさにこうした価値を追究していくことが修学旅行の目的なのです。

現在、学校教育の中心課題となっている『生きる力』とは、「生涯において生起される課題を自ら解決できる力」と考えます。『生きる力』をはぐくむために教科、道徳、総合的な学習の時間、そして特別活動があります。教科は学問をとおして、道徳は生き方・あり方から、総合学習は身の回りを取り巻く課題から、特別活動は自治的活動や集団づくりといったように、それぞれの領域を生かした課題をもとに追究していくことが求められています。

修学旅行についても、「生きる力」を育成する観点から、自治的・集団的活動をもとに、学校では経験できない出会い・ふれあい・発見を通して喜びや感動を味わい、“学びの創造”に取り組む必要があると思います。つまり学びの価値を与えていく意図的な学習計画があるべきです。

その意味で、何を体験させるかということ以上に、体験によって何を学ばせるかが大切なのです。修学旅行でねらいを具現化するための方法として各学校が体験活動に目を向けより一層の教育的な効果を生み出しています。五感を通した体験と感動から感性がゆすぶられ、学習をより効果的にする事につながっています。「人間としての生き方について自覚を深め、これからの自己を活かす能力を養う」ために実生活に結びつけた修学旅行の在り方が今後ますます求められます。

昨年起こった東日本大震災の記憶はいまだ鮮明に蘇り、多方面にわたり多大な影響を与えました。修学旅行についてもその影響は大変大きなものでした。東北方面への修学旅行のみならず、関東方面を予定していた学校等も方面変更あるいは日程変更するなどの学校が見られました。原発事故の風評被害、がれきの処理等未解決なものも多く、東北方面への修学旅行についてはいまだ以前の状態に戻っていないといった現状があります。

また、教訓として修学旅行中における安全対策等についても各学校ごとに十分な対策を立てておくことが緊急の課題と考えられます。

そこで今年度は、関東地区における中学校での実施状況調査をはじめとして、「修学旅行における安全対策」の取り組みについての調査研究をすることとしました。

各学校において「どのような安全対策が講じられ、どのようなことが考えられているのか」調査研究を進めることで、子ども達の実践活動に生かされ、さらに教育効果を高める事が出来たら幸いです。「修学旅行における安全対策」については経営者の立場から校長先生に回答をお願いしました。

今日の研究発表会の開催にあたって埼玉県はもちろんのこと各県教育委員会をはじめ、関係教育諸機関のご協力とご支援を賜り、修学旅行の研究を深めることは大きな意義があると考えます。

目 次

1	研究発表会次第	1
2	あいさつ	2
	関東地区公立中学校修学旅行委員会会長 近 藤 誠	
	公益財団法人全国修学旅行研究協会理事長 岩 瀬 正 司	
3	研究発表1	4
	「日本の伝統文化(お茶)と触れあう修学旅行」	
	いるま市立金子中学校教諭 井 上 悦 弘	
4	研究発表2	6
	「豊かな心の育成を目指した修学旅行の取組」	
	— 広島修学旅行の実践を通して —	
	熊谷市立中条中学校校長 島 崎 一 雄	
5	関東地区公立中学校修学旅行委員会報告	25
	研究委員長 さいたま市立三橋中学校長 根 岸 次 郎	
6	指導講評	30
	埼玉県教育局義務教育指導課 指導主事 木 村 孝 之 先生	
7	研究発表のあゆみ	39

<付録>

修学旅行の実施状況並びに「修学旅行における安全対策」の取り組みについて
調査集計結果の分析と考察

研究発表会次第

1 大会主題 「感性をはぐくむ修学旅行」

2 日 程

(1) 受 付 (13:00～13:30)

(2) 開会行事 (13:30～13:55)

・開会のことば

関東地区公立中学校修学旅行委員会運営委員長 守屋 勝利

・主催者あいさつ

関東地区公立中学校修学旅行委員会会長 近藤 誠

公益財団法人全国修学旅行研究協会理事長 岩瀬 正司

・来賓祝辞

埼玉県教育委員会教育長 前島 富雄 様

さいたま市教育委員会教育長 桐淵 博 様

・来賓及び指導者紹介

(3) 関修委活動報告 (13:55～14:10)

(4) 研究発表 1 (14:15～14:40)

「日本の伝統文化（お茶）と触れあう修学旅行」

入間市立金子中学校教諭 井上 悦弘

<休 憩> (14:40～14:55)

(5) 研究発表 2 (14:55～15:20)

「豊かな心の育成を目指した修学旅行の取組」

— 広島修学旅行の実践をととして —

熊谷市立中条中学校校長 島崎 一雄

(6) 研究協議 (15:20～15:40)

(7) 指導講評 (15:40～16:00)

埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 木村 孝之 様

(8) 閉会行事 (16:00～16:10)

・閉会のことば

関東地区公立中学校修学旅行委員会運営委員長 守屋 勝利

・諸連絡



研究発表会の開催にあたって

関東地区公立中学校修学旅行委員会
会 長 近 藤 誠
(埼玉県川越市立川越第一中学校長)

第48回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会が、関東各地から多くの皆様の御参会をいただき、本県さいたま市において開催できますことは、大変な光栄であり大きな喜びでもあります。また、開催にあたりまして、これまで多大な御理解、御協力、御尽力を賜りました関係の皆様にご心より御礼申し上げます。

さて、甚大な被害と多くの犠牲をもたらした東日本大震災は、様々な分野にわたり、これまでの我が国で「自明」と思われていたことがらに再考を迫る契機ともなりました。学校教育に関しても、児童生徒の安全確保と安全教育の在り方などについて、各学校と地域の実態に即した再検討・見直しが進んでいることと思います。旅行・集団宿泊の行事における安全対策や危機管理等についても、本会でも調査研究を進めているところではありますが、今後とも一層安全で充実した修学旅行を目指して、会員各位の英知を結集していただきたく思います。

本年度の研究大会の主題は「感性をはぐくむ修学旅行」です。本会では、これまで研究主題を「感性をはぐくむ修学旅行の展開」と定め、各中学校での事例に基づいた研究成果を蓄積して参りましたが、その成果を継承し、さらに具体的かつ実践的な研究に取り組もうとしているところです。各校の修学旅行の一層の充実発展に資するためにも、御参会の皆様には、積極的な発言・協議をお願い申し上げます。

我が国の修学旅行は、明治以来の伝統に裏付けられた学校文化とも言うべきものであり、将来を担う生徒の育成に大きな意義のある教育活動であります。本年度より全面実施されております中学校学習指導要領の趣旨をふまえつつ、各校の修学旅行が教育計画に適切に位置づけられて、全ての旅程が安全に実施され、参加生徒の感性がはぐくまれるとともに、公共の精神が培われることなどにより、保護者・地域との信頼関係のさらなる醸成に繋がるように願ってやみません。

最後になりましたが、研究発表会の開催に際しまして、御後援をいただきました埼玉県、さいたま市、群馬県、茨城県、栃木県、千葉県、千葉市の各教育委員会と中学校長会をはじめとする関係の皆様へ、あらためて御礼申し上げます。また、運営にあたり御指導、御支援を賜りました公益財団法人全国修学旅行研究協会の皆様にも深甚なる感謝を申し上げまして開催にあたってのあいさつとさせていただきます。

関東地区公立中学校修学旅行研究発表会の開催に当たって



公益財団法人 全国修学旅行研究協会
理事長 岩瀬 正司

第48回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会が、ここ「さいたま」の地で開催できますことに心より感謝申し上げます。これもひとえに、関東地区公立中学校修学旅行委員会（関修委）の皆様方のご尽力はもとより、関東地区各県の教育委員会並びに中学校長会の各段のご支援のたまものと、この場をお借りして深く御礼申し上げます。また、公私ともご多用の中、ご参会いただきました皆様方にも厚く御礼申し上げます。

「さいたま」とは、幸福をもたらす神である「幸魂（さきみたま）」が語源という説があるそうですが、学校生活の中でも大多数の生徒たちが幸福感を体験する修学旅行についての研究大会が、この「さいたま」の地で開催されることも、何かのご縁かもしれません。

さて、本年度より中学校では新しい学習指導要領が全面実施され、小・中・高の3校種共通に「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」を基盤にして「生きる力」を育むこととしています。このことは従前の学習指導要領の流れを踏まえており、「特別活動」の「旅行・集団宿泊的行事」の項も、文言に変化はありません。

しかしながら、今回の改訂のポイントとして、「言語活動の充実」や「理数教育の充実」等の改善事項が指摘されています。このことと、授業時数の増加、これは中学校ではたった週に1時間授業時数が増えることだけなのですが、この授業時数の増加は、学校現場に大きな影響を及ぼしているのではと危惧しています。

教科時数の確保が最優先される結果、修学旅行に関しての事前学習や事前指導、放課後の活動はどう確保されるのでしょうか。先生方も新しい学習指導内容の研究・習得に時間を取られる等多忙化に拍車がかかり、修学旅行に関しての先生方の共通理解や意見交換の時間も減少しているのではないのでしょうか。

このような中であって、「感性をはぐくむ修学旅行」を主題とする今回の研究大会で、これからの修学旅行の一指針となるであろう入間市立金子中学校、および、熊谷市立中条中学校の実践・研究発表には、期待するところは大きいものがあります。

最後になりましたが、ご多用の中、大会開催に当たられました先生方、ご来賓としてご臨席いただきました、埼玉県ならびにさいたま市の教育委員会の皆様方、指導・講評をいただきます、埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 木村孝之様に厚く感謝申し上げます。

本日の会が、関東地区の公立中学校ならびに中学生たちにとって、有意義なものになることを祈念して、あいさつとさせていただきます。

＜研究発表 1＞

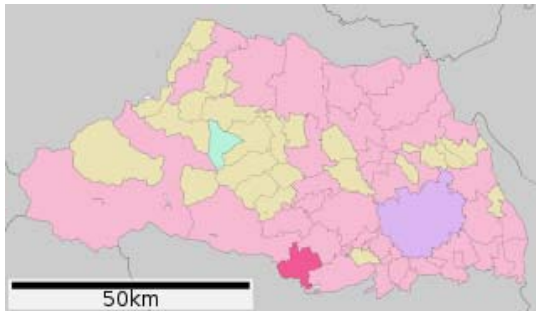
日本の伝統・文化（お茶）と触れ合う修学旅行

入間市立金子中学校

教諭 井上 悦弘

I. はじめに

入間市は、埼玉県南西部にある人口約15万人の市である。市の南部には、狭山丘陵の豊かな自然が広がり「狭山茶」の主産地として有名である。それにより農業都市というイメージで強く見られることも多いが、武蔵工業団地や狭山台工業団地など、市制施行以来工場誘致を積極的に行い、県内有数の工業都市となっている一面も持っている。また、市の南側は東京都と境を接し、大型の商業施設のオープンに伴い、各家庭の生活圏も幅広くなりつつある。



金子中学校は、市内で2番目に古い伝統校である。開校以来65年を経過するとともに、市制施行以前からの「教育村金子」の伝統を有した、地域に根ざした学校でもある。先に述べたように、入間市の中でも狭山茶生産の中心地であり、茶畑と加治丘陵に挟まれた校区はとても広く、製茶業に携わる家庭の生徒も多い。保護者や地域は、学校に対する関心・協力が高く、PTA・教育後援会をはじめ、青少年健全育成会、区長会、APOC(地域防犯ネットワーク)、民生児童委員協議会等より様々な支援を得ている。

しかし、時代の変化に伴い、保護者の価値観や家庭教育の姿勢は多様化しつつあるのが現状でもある。本年度は、学級数9学級、生徒数284名、家庭数260世帯となっており、市の中では小規模校に属する。学校教育目標は『さわやかな中学生・自ら学ぶ生徒・心の豊かな生徒・体力のある生徒』であり、その実現に向け日々の教育活動に邁進している最中である。生徒は全体的には穏やかでまじめな生徒が多く、一小学校からの持ち上がりで入学してくるため、よく言えば人間関係が濃密であり、相互理解が深まっていると言える。しかしながら、人間関係に新たな展開が見られず、閉鎖的な側面も持っている。尚、23・24年度は、北校舎改築工事の為、全校生徒は仮設校舎で授業を受けている状況である。



また、入間市内の小中学校では、「狭山茶とふれあう教育」を推進しており、小学生の茶摘み体験・手揉み茶体験や中学生の茶席体験を各校で行っている。そして、お茶とふれあう体験を通して、郷土に栄えるお茶文化への理解を深めている。本校でも、平成25年度に完成する新校舎内に茶室がつくられることになっており、来年度の1年生から総合的な学習の時間で茶道(盆点前)を学ぶ計画となっている。また、校舎内には、各階の水道脇にお茶を飲むことができる「TEA CORNER」が設置されており、生徒たちは休み時間等にお茶を飲み、休息をとる姿が見られる。そのような環境の中で、学年ごとに実施されている「お茶に関する体験」を身近な形で3年生での修学旅行に結びつけていくことはできないかと考え、本発表に至っている。

II. 1年時でのお茶と触れ合う行事への取り組み

入間市博物館（アリット）での茶席体験 平成22年10月22日（金）実施



ねらい ①博物館の見学、茶席体験を通して、郷土の産業や歴史に触れ、郷土への関心を広げる。

②クラス別行動、班行動を通して、まとまって協力する力を育てる。

③集団行動のルールや公衆道徳を学ぶ機会とする。また、博物館見学の決まり、マナーを知り、それを実行する。（修学旅行を見据えて）

体験内容 ①抹茶体験 ② 常設展見学 ③ ビデオ視聴（Q&Aお茶百科・日本のお茶）
※その他、おいしいお茶の入れ方講座を3クラスで時間を区切って体験した。

本校から、バスで10分ほど離れた場所にある入間市博物館で、クラスごとに茶席体験を行った。1学期には、入間市青少年活動センターまで、校外学習として班単位のウォークラリーを実施したが、交通機関(バス)を使っでの移動は中学校生活で初めてとなり、

修学旅行に向けての練習として捉えることができた。また、博物館内の常設展見学(郷土の歴史・文化)を巡る調べ学習においても、班単位での行動となり、修学旅行での班別行動に向けての練習となった。

Ⅲ. 2年時でのお茶と触れ合う行事への取り組み

① 手もみ茶体験 平成23年12月 2日(金)実施

入間市手もみ狭山茶保存会と金子地区青少年健全育成推進会のご協力により、本校第2学年の生徒全員を対象に手もみ茶の見学、体験を実施した。



ねらい 地域の伝統を知り、地域の伝統・文化を継承し、実践する。

体験内容 手もみ茶の体験

当日は、入間市手もみ狭山茶保存会の方々のご協力により、各クラス約1時間程度の体験となった。地域のメディアはもちろん、NHKのカメラ・取材も入るなど体験の様子は学校内外で紹介されることになった。

生徒の感想

- | |
|--|
| ・あたたかい台の上で、教えてくださった方の手に吸い付くように茶葉が転がっていたように見えたのが不思議で印象的でした。 |
| ・私は、今回初めてお茶づくりを体験しました。小学生の頃「お茶を作る工場」を見学したことはありましたが、それを手作業でやるというのは本当に大変なことだとわかりました。「伝統の技」というのは本当にすごいと思います。このようなおいしいお茶をつくる伝統がいつまでも残るといいなと思います。 |
| ・体験する前は簡単そうに見えて、ただ、お茶をまぜるだけかと思っていたけれど、実際はいろいろ順番があり、やり方も難しくて私にはすぐにできませんでした。新たにお茶についてわかったこともあったので良かったと思いました。 |

② 煎茶体験 平成24年 3月 2日(金)実施



ねらい 自分達がつくった手もみ茶の茶席体験を通して、茶の文化を知り、自ら学び行動する態度を育てる。

体験内容 煎茶体験

当日は、本校の元PTA会長でもあり、地元の博物館(アリット)でお茶に関する数多くの講座を担当しておられる双木茂芳先生を講師に迎え、2年生全員を対象に煎茶体験を実施することができた。このときは、仮設校舎のため大会議室に畳を敷いての体験となったが、来年度からは新設の茶室での実施となる。

生徒の感想

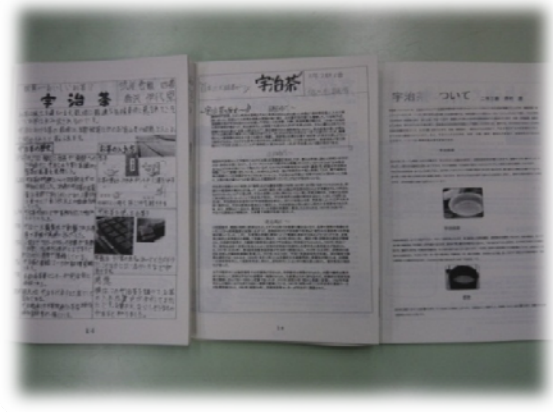
- ・今日の体験で、お茶を入れるにはちゃんと手順があることを知りました。また、ちょうどよい温度やお茶の入れ方などがわかって良かったと思います。初めに飲んだお茶は苦くてびっくりしましたが、2回目に飲んだお茶はちょうど良かったのでおいしく飲めました。これからお茶を入れて飲むときは、今回学んだことを生かしておいしいお茶になるようにしたいと思います。
- ・以前、煎茶にも茶席の決まりがあるというのは聞いたことがありました。でも、実際に体験するのは初めてで1年生の時の抹茶体験とは違うんだなと思いました。お茶をふるまってくれる人との距離が近く、抹茶ほど固い感じはしないように思いました。丁寧にお客さんのために入れたお茶はとってもおいしかったです。いつか私もあんなおいしいお茶を入れたいです。
- ・興味のあるお茶の作法を教えてくださいました。抹茶に比べ、煎茶の歴史は浅いそうですが、日本人らしい心遣いの作法があつて素敵だと思いました。

IV. 修学旅行への準備

① オリジナルガイドブックづくり(2年時)

修学旅行の事前学習として、金子中オリジナルの「京都・奈良ガイドブック」を2年生の3学期に作成した。目的としては、①「修学旅行」への意欲を高めるため ②「京都・奈良」についての知識を得るため ③「京都・奈良」での班別自主行動の計画づく

りのため ④「調べ学習」「資料のまとめ方」「発表」がさらに上手になるため等である。具体的には、事前に指定された「京都の名所」「京都の文化」「奈良の名所」「奈良の文化」の中から一人で「1つ」を担当し、さらに班全員で協力して作成するものも含まれ、クラスごとに1冊の冊子をつくりあげた。調べる手だてとしては、各クラスに配られる「修学旅行関係の本・雑誌」「学校のパソコン」「各家庭にある資料」「家の方や先輩、先生方からの情報」をもとにB4サイズの新聞形式でまとめを行った。生徒たちは、この自作のガイドブックをもとに、2年時中に各自の「修学旅行2日目おすすめ行動プラン」を作成。新年度4月後半に新クラスでの修学旅行班が編成されたのち、それぞれのクラスで作成されていた班員のプランを自分のプランと比較検討しながら、「京都市内班別タクシー行動」の計画を完成させていくために活用された。



〈クラスごとに作成されたガイドブック〉〈ガイドブック内の宇治抹茶についてのページ〉

V. 平成24年度 修学旅行実施計画（概略）

1. ねらい

金子中学校 学校教育目標 さわやかな中学生より

- ・自ら学ぶ生徒 日本の伝統文化や歴史を学び、見聞を広め、今後の生活に役立てる
- ・心の豊かな生徒 計画・準備において自分の役割を果たし、協力することの大切さを学び、集団生活における人間関係の絆を深める
- ・体力のある生徒 班別行動やクラス別行動の計画や実践を通して、自主性や責任感を身につけさせる

2. 修学旅行概要

- ・期 日 平成24年5月15日(火)～5月17日(木)
- ・場 所 京都・奈良方面
 - 1日目 法隆寺・奈良公園内見学
 - 2日目 座禅体験・京都市内班別タクシー行動
(この日にお茶と触れ合う体験を実施)
 - 3日目 クラス別バス行動
(嵯峨野方面・二条城方面・伏見稻荷方面)

・参加生徒数 男子44名 女子 51人 計 95名

当日は、欠席者なし。全員参加で実施した。

・費用 約53,000円

3. 修学旅行実施委員会

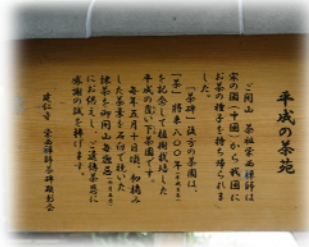
2年時の3学期から活動を開始した。学級委員(各クラス男女1名)は、実施委員を兼ね、それ以外に募集によって集まった4名の生徒が加わった。2年時中に、オリジナルガイドブックの作成・印刷・製本、3年時になってからは、しおりの原稿依頼・編集・印刷・製本を行った。また、学級委員を中心に2年時中に生徒目標・決まりの原案作成を行い、学級会での意見交換を行うなど、修学旅行に向けての学級会活動の中心的存在として活動した。

VI. お茶と触れ合う体験①〈お茶の歴史を知る〉建仁寺での座禅体験 2日目(9:00～10:00) 実施



修学旅行2日目の朝、宿舎(NISHIYAMA RYOKAN 京都市中京区御幸町)から鴨川沿いを歩き、建仁寺に移動(約30分)。建仁寺は、日本の茶祖とも呼ばれている栄西禅師によって開かれた禅寺として有名である。さらに栄西禅師は中国から茶種を持ち帰って日本において栽培を奨励し、喫茶の法を普及された事が知られている。特に、それまでにあったごく一部の上流階級だけに限られていた茶を広く一般社会にまで普及されたということを考えれば、現在の我々の生活の中にある狭山茶と関係があることも考えられる。そのような歴史のあるお寺での座禅体験をすることにより、自分たちの地域に伝わる狭山茶との関係を学ぶと同時に、狭山茶を違った角度から見直すよい機会となった。

朝一番ということもあり、観光客や修学旅行生も少なく、境内の静けさの中で座禅を組むことができた。その後、法話を聞き、駐車場に待機していたジャンボタクシーに乗って京都市内班別行動に出発した。



〈建仁寺内にある、茶碑と茶園〉

※茶は、今日では日本人の日常生活に欠くことのできない飲料であるばかりではなく、茶道の興隆と共に東洋的精神の宣揚にも役だっています。建仁寺開山・栄西禅師が日本の茶祖として尊敬されるのはそのためです。〈建仁寺ホームページより引用〉

お茶と触れ合う体験②〈宇治抹茶を味わう〉 2日目班別タクシー行動中の様子



〈班別行動中にそれぞれの場所・時間・費用で体験〉

2日目班別タクシー行動中に、「宇治抹茶を味わう」時間を班ごとに30分程度設定した。自分たちの立てた行動計画に支障が出ない程度で、お茶との触れ合いの場を設けるというものであった。班によっては、自分たちで事前に調べた場所(ガイドブックやインターネット等を活用)に行ったものもあれば、タクシーの運転手さんのお勧めの場所に連れていってもらい、「宇治抹茶」を味わう機会を満喫することができていたようである。特に、京都の街を知り尽くした運転手さんは、生徒たちが作成した行動計画を予め把握しており、お店の混み具合等を配慮して生徒たちにゆったりとお茶を味わう時間を作り出してくれた。

生徒の感想

- ・暖簾や板張りの廊下、中庭など雰囲気があるお店で頂いた宇治抹茶は大人の味がしました。今までお茶について学んできましたが、こういうお茶の楽しみ方もあるのだと知りました。京都での修学旅行ならではの体験ができて良かったと思います。
- ・宇治抹茶を京都で初めて飲んでみて、予想外に苦くてびっくりしました。飲む前は、結構甘いかと思っていたので、やはり実際に体験してみなければわからないことが知れて良かったです。でも、今回の経験で抹茶が少し好きになったので、家でも工夫して飲んでみたいと思いました。
- ・清水寺の近くで抹茶の粉がかかっているアイスを食べました。お茶の苦みとアイスの甘さが絶妙でとてもおいしかったです。また、知恩院で飲み物を買おうとしたとき、日本のお寺らしい不思議な自動販売機を見つけました。（「知恩院のお茶」と書いてあり、それしか売っていませんでした） 狭山茶とは少しちがう味だったけどおいしかったです。



お茶と触れ合う体験③〈狭山茶・静岡茶・宇治茶の比較〉

“色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす”（狭山茶摘み歌の一節）

全国にはいくつかのお茶の産地がありますが、その中で狭山茶を産する埼玉県は緑茶生産の経済的北限とも言われている。また、「狭山茶摘み歌」にも歌われているように、埼玉県の狭山茶・静岡県の静岡茶・京都宇治茶については、生徒たちも名前はよく知っているようである。そして、地域がら「狭山茶」こそが日本で一番おいしいお茶であると小さい頃より、よく聞かされてきている。そこで、修学旅行中に三大銘茶を味わい比較することができないかと考えた。具体的には、1日目の朝、または3日目帰着後に自宅で狭山茶を味わい、1日目・3日目の新幹線内で富士山を見ながらお弁当と一緒に静岡茶を飲み、2日目の班別行動で宇治茶の香りを体感しようという企画を立てた。



〈〈自宅で味わう狭山茶〉〉



〈新幹線内での静岡茶〉



〈京都で味わう宇治茶〉

Ⅶ. 修学旅行と教科等の関わりについて

今回の修学旅行に関する事前・事後学習の取り組みについては、「総合的な学習の時間」を活用して行われた。しかし、本年度の修学旅行の実施予定日が5月の第3週という早い時期での日程ということもあり、事前学習については、その時間内だけでは十分に確保することは困難であった。そこで、経験豊富な教師の多い本校において、教科の特性を生かした授業の中での学習活動を通して、生徒たちの修学旅行への興味・関心を高める工夫を行った。修学旅行前に授業の中で解説や説明を行った教科もあれば、修学旅行中に生徒の行動の負担にならない程度の課題を出した教科もあった。このような学習を通して、生徒たちの感性も育むことができたのではないかと考える。

教科の特性を生かした学習活動

「事前」 社会 京都・奈良の歴史（お茶との関係が深い豊臣秀吉・千利休等にも触れた
理科 奈良の大仏は合金でできている？(金属資源の活用と絡めて学習)
美術 仏像の見方や楽しみ方(仏像の種類・印相)

「旅行中」国語 修学旅行で俳句に挑戦

(旅行中に、奈良で1句・京都で1句を作成。しおりに記入する)

生徒作品(しおりに記入された生徒の作品の中からお茶に関わるものを抜粋)

・ふるさとの 風の香りは 茶の香り ・風薫る 京都の歴史と 宇治抹茶
・宇治抹茶 心広がる 京景色

美術 旅行中、見学した仏像の様子をよく観察して自分たちで真似た写真を撮る

英語 外国人にインタビュー(日本の印象について聞いてみよう)



〈美術の課題 阿修羅像？〉

〈外国の方々との交流〉

VIII. 修学旅行のまとめ

パワーポイントによる「私の修学旅行記」の作成



〈コンピューター室での作成風景〉

〈仲間の発表を評価〉

生徒たちは、小学校でパワーポイントの基礎を学んできたこともあり、中学校では各自が総合的な学習の時間の中で体験したことをまとめ、パワーポイントを使ったプレゼンテーションによる表現活動にチャレンジしてきた。1年時は、「地域に役立つこと」への取り組みとして、地域の現状（清掃が必要な場所、登下校で危険な場所等を各自で調査）をデジタルカメラで撮影し、その後、清掃活動やポスターの作成等によって、どのように変わったのかをまとめる活動を行った。1年時での発表では、作成に不慣れな面もあり、写真の数も少なく、スライド数3～4枚程度での発表となったが、実際に作成することで、アニメーションを活用したり、仲間との情報交換等によって、プレゼンテーションの様々な表現法やテクニックを学ぶことができていたように思う。2年時には、職場体験学習（3 d a y s チャレンジ体験事業）について各自でまとめ、発表を行った。3日間の活動ということもあり、スライド数は5～7枚と増え、自分の体験した内容をわかりやすく写真(教師が訪問したときに許可を得て職場外観や作業風景を撮影)や表を使って説明することができた。そして、今回が3年間の集大成としての「私の修学旅行記」の作成となった。スライド数は一人6～12枚となり、班ごとに持参したデジタルカメラによって撮影した写真を使用して、各個人の個性を活かした発表資料を作り上げることができた。さらに、発表形式が事前に分かっていたため、普段は見落としがちで細かい部分(景観条例による看板の色の違いや橋の欄干等)も記録し、発表していた生徒も見られた。

発表時間は一人3分程度（1クラス32名 2時間での発表）という設定ではあったが、各自のパソコンからの一斉送信での発表が可能であり、従来の発表前後の準備や動きの時間(発表者が前に出てくる時間や電子機器を設定する時間等)を大幅に短縮することができた。また、一人一つのモニターで発表を見ることが可能であり、座席の前後に関わらず、修学旅行中の仲間の細かい顔の表情まではっきりと確認することができた。発表

後は、発表内容、画面の見やすさ、パワーポイントの工夫などを5段階評価し、各クラスの代表者を1名決定した。さらに、各教室には普段は個人新聞等を入れるクリアファイルの中にプレゼンテーション資料が掲示され、後日行われた保護者会等で、多くの方に見ていただくことができた。



〈教室の後ろに掲示されたプレゼンテーション資料の様子〉

IX. 修学旅行発表会 平成24年 7月18日(水)

全校朝会にて各クラスの代表者が発表

本校では、学年ごとに総合的な学習の時間の中で取り組んだこと(学習)について朝会で発表している。1学期は3年生が「修学旅行」2学期は2年生が「職場体験学習」3学期は1年生が「地域の清掃活動」の様子について、学年の代表者が発表を行い、学年ごとの学習への理解を深めている。発表も学年が上がるにつれレベルも上がっており、下級生が次年度体験する内容について知る良いきっかけとなっている。本年度1学期に行われた発表会には、各クラス1名ずつ選出された生徒が発表し、自分たちの体験をもとに、後輩たちへのアドバイスを交えて発表することができた。







〈発表された生徒のプレゼンテーション資料〉

X. 成果と課題

〈成果〉

- ・今回、本校の特徴である「お茶と触れ合う体験」を修学旅行中にも取り入れることで、お茶に対する生徒個々の知識や考えが深められたと同時に「狭山茶」を違った角度から見直す良い機会となった。
- ・1年時、2年時で行ってきた「お茶と触れ合う活動」を今回の修学旅行につなげたことにより、一貫性が生まれ、より深く生徒の感性を育むことができた。
- ・一人一人が、パワーポイントで修学旅行中の様子をまとめ、発表したことで、2日目の「お茶と触れ合う体験」の様子を仲間や教師も詳しく知ることができた。
- ・「お茶と触れ合う体験」を修学旅行2日目の班別行動の中に組み入れたが、生徒の立てた行動や費用に支障がでない形で実施することができた。
- ・限られた地域でのお茶の文化ではなく、日本全国に広がるお茶の文化についても、興味・関心を持つことができるようになった。

〈課題〉

- ・今回は「お茶と触れ合う体験」を行ったが、それ以外の修学旅行中に実施可能な体験活動についても比較・検討していきたい。
- ・本年度は、事前、事後学習を個人で行うことを基本として指導を行ってきたが、従来の班を中心としての役割分担・まとめ・発表等も生徒の状況によって取り入れていく必要がある。
- ・事前、事後学習を行う時間の確保が難しくなっていく中で、今後も修学旅行と教科等の関わりを充実させていきたい。

X I．終わりに

今回、自分たちの住む地域で身近な「お茶」という一つのテーマを設定し、それにどのように迫るかを考え、また、取り組みを進めていく中で、修学旅行自体が、より味わい深いものになっていったと考えられる。そして、修学旅行をとおして「見て、聞いて、味わい、触れて、考えた」ことが生徒一人一人にとって「お茶」や「地域」を見直す契機、人生の中での貴重な経験になったと考えたい。本研究テーマである「感性をはぐくむ修学旅行」にどこまで取り組めたかはわからないが、今後も本校の生徒たちの生活の中で引き継がれる身近な「お茶の文化」が、500km以上離れた京都の地とも深い関係で結ばれていることの一端を知っただけでも、生徒たちの感性に変化があらわれてくるのではと期待して、子どもたちを見守っていききたいと思う。

< 研究発表 2 >

豊かな心の育成を目指した修学旅行の取組 ～広島修学旅行の実践をととして～

熊谷市公立中学校連合修学旅行実施委員会
委員長 熊谷市立吉岡中学校長 西木 優道
熊谷市立中条中学校長 島崎 一雄

はじめに(熊谷市ホームページより)

埼玉県熊谷市は、東京都心から50～70km圏に位置し、ほぼ平坦で荒川や利根川の水に恵まれた肥沃な大地と豊かな自然環境を有し、その区域は南北に約20km、東西に約14kmで、面積は159,88km²です。

人口は、平成17年の国勢調査によると、204,675人となり、埼玉県で9番目、県北では最大の人口を有します。

江戸時代には、熊谷宿は中山道の宿場として、また、明治初期には熊谷県の県庁所在地となり栄えていきます。大正から昭和にかけて、熊谷市は、関東大震災や先の大戦での空襲といった惨禍を克服して、以前にもまして復興を遂げ、発展しています。



1 熊谷市公立中学校連合修学旅行実施委員会の取組

熊谷市内には中学校は16校あり、中学3年生の生徒数が、300名を超える大規模校から、生徒数30名前後という小規模校まで様々である。

熊谷市の修学旅行は、関東地区公立中学校修学旅行委員会と提携し、熊谷市連合体として実施をされている。中学校長会の取組としては、校長会中学校部会より選出された実施委員長を中心に「熊谷市公立中学校連合修学旅行実施委員会」を立ち上げ、綿密な計画に沿って実施をされている。

実施方法は、中学校16校を6班～7班に分け、Bコース(6/2日頃～6/15日頃)、2泊3日の日程で関西方面(主に京都・奈良)への修学旅行を実施している。往復の交通手段は、熊谷(籠原)・上野間の高崎線では臨時列車、東京、京都・新大阪間は修学旅行団体専用列車である。京都(新大阪)から奈良方面への交通手段は、各校に応じた移動方法(公共交通機関・貸切バス・タクシー等)で行っている。また、現地における取組は様々で、京都における体験学習の実施や、班別学習や学級別の見学等工夫を凝らし、旅行・集団宿泊的行事の目的に基づいて取り組んでいる。

熊谷市連合体として実施される修学旅行は、小規模校にとっては輸送方法、費用面等において大きな恩恵を受けている。

以下は、5回の「修学旅行実施委員会」の協議内容及び実施時期である。

- | | |
|----------------------------|--|
| 熊谷市公立中学校連合修学旅行実施委員会（協議内容等） | |
| 第1回 | 正副委員長、業者打ち合わせ会（9月）
参加者：正副委員長・業者打合せ
協議事項：契約内容の確認、実施委員会開催計画について等 |
| 第2回 | 第1回実施委員会（10月）
参加者：校長会長・市教委・正副委員長・各校実施委員・業者
協議事項：実施委員会組織、班編制、前年度の反省
各校で取り組むべき内容等 |
| 第3回 | 現地調査・検討会（12月） |
| 第4回 | 第2回実施委員会（4月）
参加者：各校校長・市教委・養護教諭実施委員・業者
協議事項：実施細部の確認、各校の取組状況、救護について等 |
| 第5回 | 正副委員長、業者反省会（8月）
参加者：校長会長・正副委員長・業者
協議事項：今年度の反省、来年度に向けての立案検討等 |

2 中条中学校の取組

（1）本校の実態

中条地区は、熊谷市中心部から北東にやや離れた人口4,868名、世帯数1,813世帯の農村部である。

中条中学校の生徒数は1年生35名、2年生40名、3年生33名、合計108名（H24.5.1現在）であり、市内中学校の中で最も小規模校である。今後も生徒数の増加は見込めず、1学年ほぼ33名前後で生徒数の推移は続いていく。

全校生徒が小学校から9年間継続した人間関係にあり、男女の仲も良く互いに助け合えることができる。反面、生徒の転出入もほとんど無い状況で、閉塞的な人間関係の中で生活しているため社会性や公共心にやや欠ける面が見受けられる。小集団での生活が多くなる傾向なので、体験学習や学校行事でもなるべく一般社会や他者（他地域）との交流を多く取り入れる工夫をしている。そこで、今年度は、小学校・中学校・地域との合同運動会の開催や、近隣中学校と合同での合唱コンクールを実施した。

本校は、旅行・宿泊的行事を3年間で3回体験する。1、2年生で林間学校、3年生は修学旅行である。1・2年生は、合同で群馬県「国立赤城青少年交流の家」へP・Aの活動を中心とする1泊2日の林間学校を実施をしている。

また、キャリア教育の一環として職場体験事業を、1年生を対象に夏季休業中に5日間実施をしている。

(2) 奈良・京都ルートから広島・京都ルートへの変更理由

平成24年度から奈良・京都ルートから広島・京都ルートへ修学旅行コースを変更した。

広島は長崎と並び太平洋戦争の戦禍を被り、世界でも例を見ない被爆地である。この過去の痛ましい事実を風化させてはならない。しかしながら、戦後60数年を経過し戦争体験世代も総人口の16,5%（2010年時点）となり、今の生徒たちにとっては祖父母から戦争体験談を聞けるという状況は難しくなっている。

学校教育においても、教科、領域のみならず常日頃から日本の平和と共に国際平和の実現に向けた意識の向上及び実践力の育成に努めている。それぞれの教科・領域で工夫を凝らし、DVD・写真等の教材を活用し平和教育を実践しているが、やはり、実物を直接見られる体験学習から得られる効果には及ばない。広島平和記念資料館における見学・体験は、戦争の悲惨さを肌で感じ取れると共に、今後の日本そして世界の平和の在り方についての指針を与えてくれるはずである。

被爆地としての広島を体験学習することは、戦争の悲惨さを知ると共に生命を尊重する学習そして人権教育でもある。戦争という非人道的な戦闘は、何の罪もない多くの命を奪い取った。原爆により広島に於いて、一瞬にして奪い取られた命の尊さや、家族の嘆きそして、60数年間経った今なお被爆による後遺症との闘いに苦しむ人々の現実をしっかり把握させる。また、憎しみ合いがもたらす闘いの恐ろしさに気づかせることは、自他の人権尊重と思いやりの心を育成することにつながるはずである。さらには、様々な差別も戦争と同様の傷を負わせることを理解させていきたい。

また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う福島第一原発事故の影響は、今もその傷跡は深く長期的展望に立った対応策が迫られている。今後も放射性物質についての正しい知識と正しい対応策を身に付け、立ち向かわなければならない現実がある。広島平和記念資料館の見学は、悲惨な戦争がもたらした原爆被害を知ると共に今後の平和の在り方やエネルギー問題等を適切に解決していく一助になると思われる。

以上のことから、過去の傷の教訓を生かしつつ現在の傷を癒すに必要な薬の一つとなると思われる広島、そして日本の代表的な歴史的文化遺産を学習する京都を巡る修学旅行コースを設定した。

(3) 事前指導及び事後指導等について

ア、事前指導

2年生の歴史的分野では、「古代から近代の日本」における京都の歴史を学習し、3年生の歴史的分野において第2次世界大戦における広島を学習した。今年は、広島を修学旅行コースに取り入れたこともあり、埼玉県平和資料館の出前授業「ピースキャラバン(資料館がやってくる)」を実施した。

また、総合的な学習の時間や理科の時間において、放射線について知識の習得や京都における名所旧跡等の歴史的由来について調査を実施した。

＜出前授業の様子＞



イ、事後指導

3年理科分野の「エネルギー(1分野)」で放射線について再度確認した。

また、国語分野及び総合的な学習の時間では、「修学旅行記」として修学旅行を振り返りながら平和学習及び歴史学習のまとめとした。

さらに、3年公民的分野の「私たちの政治」の項目において改めて平和の尊さと平和を愛する心情をより深めた。

ウ、自主研修(見学方法)等について

33名という生徒数は、旅行中の移動方法で大型バスを使用せずにする人数である。自主研修・見学地への移動方法は、今まで活用してきたジャンボタクシーや貸切バスから公共交通機関を利用した移動方法に戻した。これは、地域や生徒の実態を踏まえ、公共交通機関を利用することで様々な人々との触れ合いを通し、道徳的実践力及び公共心を養う絶好の機会であると捉えたからでもある。

自主研修・見学時は5名～6名の男女混合で構成する班別行動を主体とした。男女の仲が良く協力して進めていくのに適度な人数である。

(4) 旅行行程等

旅行先	広島・京都方面
期 日	平成24年6月3日(日)～6月5日(火) 2泊3日
1日目	熊谷発→(臨時列車)→上野着→東京発→(団体専用列車)→京都着 7:56 8:59 10:23 12:41   京都発→(のぞみ25)→広島駅着(路面電車)→広島原爆ドーム前着→ 12:52 14:38 15:20 広島平和記念公園『班別行動(カ`ト`2名)』 広島原爆ドーム前発→ 15:30 17:30

	   広島駅着→夕食会場→(広島駅前自由行動)→徒歩→広島宿舎着 18:00 19:00 20:00   広島宿舎 「広島ホテルセンチュリー21」
2 日 目	宿舎発→広島駅発→(のぞみ10)→京都着→解散『班別自主研修』開始→ 8:00 8:37 10:14 10:30    →宿舎集合(太秦) 18:00  京都宿舎「菊香荘」
3 日 目	宿舎発→JR太秦駅発→(JR山陰本線)→JR嵯峨嵐山駅着→ 8:10 8:35 8:43 『班別自主研修』開始→JR嵯峨嵐山駅集合 発 → 京都駅着 8:50 12:15 12:46 13:03    京都発→(団体専用列車)→東京着→上野発→(臨時列車)→熊谷着 13:35 15:56 16:53 18:00

費 用	・ 交通費	26,750円（新幹線・JR山陰本線・路面電車等）
	・ 宿泊費等	28,086円
	・ 写真代	800円
	* 広島平和資料館の入館料は、事前に団体申し込みを行うため無料。	
	・ 合 計	55,636円（H23年度決算額 60,207円）

（５）その他

広島平和公園及び平和資料館を案内してくださった石原さんからの手紙

拝啓

このたびは修学旅行という大きな行事を無事終了されましたことに何よりとお慶び申し上げます。

原爆被爆地、広島を旅行地を選んでいただきました上に、貴重な時間を平和学習に当ててくださいましたこと大変ありがたく心よりお礼を申します。体験談や



平和公園内の慰霊碑めぐりを通して生徒の皆様に戦争の悲惨さ、平和、生命の尊さを語りたい。そして一緒に考えたいと思っておりますのに、十分に伝えることができなくて申し訳ない気持ちでいっぱい、疲れている時間にもかかわらず静かに真剣に聞いてくださった生徒さんのやさしさに感謝しております。被爆者は病気や高齢化で語る人が少なくなりつつありますが、一人でも多くの若者に伝える活動をライフワークにしたいと強く思うこの頃です。生徒さんは学校生活に戻られ元気に頑張っていることでしょう。健康で楽しい思い出を共有する日々でありますように祈っています。先生方におかれましてはお身体にご留意くださいますように。

末筆になりましたが、当時は謝礼をたまわりましてありがとうございました。8月6日に行います「平和記念式典」参拝者用の休憩所としてテント三張、椅子200脚のリース設営、冷茶、おしぼり、献花用のお花代等有意義に使わせていただき、学校や生徒さんのお小遣いを無駄にしないことをお約束してお礼に代えさせていただきます。

暑い日の午後にもかかわらず、生徒のみなさんの目で聞く姿はとてもさわやかに感じられました。熊谷市は高校生が来広されますので、3年後のみなさんにまたお会いできるかな・・・と楽しみです。

敬具

広島被爆者援護会 石原 智子

生徒お礼の手紙より

拝啓 石原様

この度は、お忙しい中私たちのために原爆ドーム・平和公園・資料館を案内してくださりありがとうございました。暑い中わかりやすくていねいに教えてくれ、とても当時の様子が伝わってきました。

(中略)

石原さんのお話では自分たちが調べたこと以外にたくさん知ることがありました。韓国人のお墓があることや、いまだに名前がわからない、家族が見つからない人のお墓があること。爆風で飛んだ石のことなど、広島に行かなければわからなかったことをたくさん教えていただきました。

このことを後世に伝えていけるよう、またみんなと協力してこの先2度とあのようなことが起きないようにしたいです。

本当にありがとうございました。

敬具

3年2組 栗原 彩乃



石原さんへ

先日はお世話になりました。

私ははじめて広島に行きました。平和学習ということで戦争の当時の話や戦争が終わってからの話を詳しくわかりやすく話してくださってありがとうございました。

(中略)

石原さんの話の中で午前8時15分にスピーカーから音が流れるということを知り、今でも戦争からつながっているんだなと思いました。

大人になっても、広島に行き、平和学習・原爆・戦争のことを学んだということを忘れないようにしたいです。そして、自分の子どもができたなら話せるようにしたいです。

これからも、お身体に気をつけて「最後の被爆者」という夢を叶えられるように頑張ってください。私も受験頑張ります。

3年1組 湯澤 瑞希





拝啓

この度は、暑い中私たちのガイドをしていただきありがとうございました。私たちは、石原さんのガイドにより少しは原爆についてわかったと思います。

石原さんはこれまでに胎内被曝で苦しんで来たと思います。でも今は元気に色々なことを話してくださってありがとうございます。

(中略)

毎年8月6日にある記念日を1回だけ見たことがありました。その時には、500人以上の人が黙祷をしているのを見ました。今年は集中してみたいと思います。今年石原さんに教えてもらったことを家族や友だちに教え、色々な人に戦争や原爆のことを受け継いで、一生日本は戦争をしないようにしていきたいと思います。石原さんありがとうございました。

敬具

3年2組 鯨井 悠人

拝啓 石原智子さんへ

お元気ですか？

(中略)

私は、小学校の時から「戦争」というものに興味があり、原爆のことや沖縄の陸上戦、特攻隊や硫黄島での戦いなどたくさんの映画や資料を見てきました。

今回、修学旅行という形で「広島」に来られたことを嬉しく思います。私は何よりも「原爆ドーム」を見たくて来ました。石原さんがお話をしてくださっている途中にも原爆の悲惨さがわかりました。何より、原爆ドームを間近に見ることができたこと。本当に言葉を失う



ものでした。でもそれは、「かわいそう」「大変だった」とかそういう気持ちだけではなく、当時の日本が考えていたこと、アメリカとどうして戦わなければいけなかったのか、どうして広島じゃないといけなかったのかとそういう気持ちでいっぱいでした。

広島の元々の土地の高さ、飛ばされた墓石。埋め立てて、埋め立てて今の広島の高さになったと、そうしなければ今の広島は無いと私は思いました。

(後略)

3年1組 栗原 榛花

石原さんへ

石原さん、お久しぶりでございます。この度は、僕たちの修学旅行での原爆ドームの説明ありがとうございます。僕は、今回の修学旅行で石原さんからたくさんのことを学びました。1つ目は、原子爆弾の怖さについてです。原子爆弾の恐ろしさは、熱風や爆風もそうですが、放射能が一番怖いという事がわかりました。放射能のせいでその時受けた人だけでなく、その後の人たちまでも原子爆弾の恐怖から逃れられないという事がわかりました。

(中略)



僕は、石原さんの言葉を聞き、「もの」を見ました。僕はあのことを後の世代にも伝え、ずっと忘れないようにしたいです。
ありがとうございました。

3年1組 永松 丙大

3 今回の修学旅行における成果と課題

(1) 成果

ア、全体的に

- ・歴史学習と平和学習の両方を学習でき有意義であった。歴史学習での京都、平和教育における広島というように目的が明確に分かれていたため生徒の興味も薄らぐことなく終了できた。
- ・事前学習等が徹底していたため、取組姿勢は良好であった。これは、出前講座「ピースキャラバン」の活用及びVTR(きみはヒロシマを見たか)による指導の徹底が効果を上げた一因と思われる。
- ・新幹線・路面電車・市バス(京都市内)を利用した自主研修等、一般客と同席する場面が増えたことで、場をわきまえた行動をとれたり、路面電車内では席を譲る場面を見かけた。公共心も少し高まったと思われる。
- ・少人数のため移動もスムーズにできたので時間を有効に使えた。上野駅での時間調整は非常に良かった。東京駅での待機では待機場所と待機時間の調整で苦労した経験がある。

また、帰路においてはJR山陰本線の連絡通路で時間調整ができ、直接新幹線ホームに上がったため京都駅コンコースでの待ち時間もなく、生徒の気持ちの緩みもなかった。

- ・広島では、自主研修→夕食→自由時間→入室と時間にゆとりがあった。
- ・京都における自主研修は、京都駅解散で旅館の位置を地図のみで知らせただけであったが、思いの外迷わずに行動できた。
- ・公共交通機関のみ利用したコース設定であるため、出費を抑えることができた。

- ・担当旅行業者(近畿日本ツーリスト)と綿密な打ち合わせができ、業者も積極的にコースを開拓してくれたので有意義に過ごすことができた。

イ、宿泊地・宿泊施設等

- ・広島では、夕食を外食（広島お好み物語）にしたので、部屋食とはまた違った雰囲気味わえた。
- ・広島のホテルは駅に近く、移動にも好都合であった。
- ・京都では、JR 山陰本線を利用できる位置(太秦)に旅館があったため、最終日(3日目)、嵐山散策もゆったりと時間を使えた。
- ・ホテルのと旅館という宿泊スタイルの異なった体験も良かった。

ウ、見学・自主研修等

- ・ほぼ予定時刻通りの行程であった。
- ・平和公園内のガイドさん（胎内被爆者）による案内は、広島の苦悩等の生の声を聞くことができ大変効果的であった。

(2) 課題

ア、全体的に、

- ・修学旅行初日（現在は、2日目に広島までの臨時列車は運行されている）に東京・広島間の臨時列車が運行されれば、宮島方面も見学可能になるなど、より広島のバリエーションは増える。
- ・昼食時の弁当にかかる費用が高すぎる。改善策は無いものか。

イ、宿泊地・宿泊施設等

- ・公共交通機関利用重視のスタイルでは、京都の宿泊場所（位置）によっては、最終日に実施する自主研修のルートも制限を受ける。嵐山、二条、高台寺、または京都駅付近での宿泊が可能ならば、3日目の自主研修にも利用しやすく、時間を有効に使える。

ウ、見学・自主研修等

- ・京都市内の自主研修では、昼食時間は余裕を持って計画する必要がある。
- ・平和資料館の見学時間は、1時間30分から2時間程度は欲しい。（今年度は、1時間程度であった）
- ・平和資料館内自主研修時に使用するワークシートは、平和資料館から無料で提供されたもの(平和学習ワークブック)ではなく、生徒の実態に合わせ簡単に記入しやすいよう工夫した自作のシートを準備した方がよい。
- ・平和資料館内の自主研修はガイド付き見学か、生徒だけの自主見学のどちらの方が効果的なのかは意見が分かれる所である。（計画当初は、資料館内は班別の自主研修でガイドはつかない予定であったが、同行してくれた。）
- ・平和公園内のガイド利用については、天候に左右される心配がある。

[illegible]

埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 木村 孝之 先生

関東地区公立中学校修学旅行委員会「研究発表会のあゆみ」

昭和41年以来、次の研究発表会を実施した。(敬称略)

回	年度	発表者	県・学校名	◎講師	研究内容・講演内容
1	昭和41	増淵 増雄 吉沢庸之進 関根武之進	栃木・泉が丘中 千葉・柏中 埼玉・黒浜中		・修学旅行のカリキュラムについて ・修学旅行の安全対策 ・修学旅行の保健衛生について
2	42	高島 栄治 根岸 幸治	茨城・赤塚中 群馬・昭和東中		・修学旅行における事故の発生と対策 ・中学生の関西修学旅行の実施について
3	43	◎宮本 常一 荒幡 義輔 ◎小沼 常治 君島 光夫	武蔵野美術大学 埼玉・本太中 東京桜町高校 栃木・南犬飼中		講演「日本の宿の変遷と修学旅行」 ・修学旅行の問題点の教育的思考 講演「修学旅行における見学指導の在り方」 ・栃木県における修学旅行の実態
4	44	小泉 義 高田 福松 君島 光夫 本間 康一	茨城・水戸五中 埼玉・幸手中 栃木・南犬飼中 千葉・川間中		・安全実施のための運営と問題点 ・今後の修学旅行の在り方 ・生徒の手による修学旅行 ・特別活動としての学校管理上の問題点
5	45	現地研修会(京都)			
6	46	◎宮本 常一 人見 芳正 塩入安三郎 兵頭 ヤス	武蔵野美術大学 栃木・箒根中 栃木・鹿沼西中 栃木・田沼東中		講演「修学旅行における望ましい観光の在り方」 ・小、中、高の関連の中で ・わかくさ号で行こうとしたのに ・新幹線を利用して
7	47	◎樋口 清之 高橋 武司 高田 福松	國學院大学教授 千葉・柏中 埼玉・幸手中		講演「歴史の真実」 ・より効果的な修学旅行について ・修学旅行引率費負担の現状と公費負担
8	48	◎佐藤 政次 高田 福松	茨城土浦日大高校 埼玉・幸手中		講演「歴史と暦」 ・修学旅行の意義と目的
9	49	◎樋口 清之 菊地昌一郎	國學院大学教授 埼玉・加須北中		講演「旅と情報伝達一忍者の正体」 ・オリエンテーリングを取り入れた修学旅行の実際
10	50	◎萩原 進 谷 正久	群馬郷土史家 群馬・古巻中		講演「群馬の風土と人」 ・群馬県の修学旅行の現状
11	51	神坂 重光 桑川 妙子	茨城・古河二中 栃木・藤岡二中		・本校における修学旅行の企画運営 ・我が校の修学旅行の理論と実際 ー自主の気風を目指してー
12	52	坂田 次雄	千葉・松戸三中		・修学旅行における道德教育の実践
13	53	吉田 貫 潮池 ルミ	茨城・水戸二中 埼玉・蕨東中		・充実した修学旅行を目指して ・修学旅行における観察学習を効果的にするために ーしおり作成と活用ー
14	54	生方実太郎 阿部 茂	群馬・多那中 群馬・新治中		・集合教育を取り入れた修学旅行 ー生徒の主体的な取り組みー ・有意義な修学旅行にするために ー新幹線における車窓教育ー
15	55	荻部 正夫	栃木・久下田中		・有意義な修学旅行にするために ー奈良公園におけるグループ別活動ー
16	56	天田 和之 平田 幸平	埼玉・岡部中 埼玉・日進中		・東北修学旅行を実施して ・総力を挙げての修学旅行の運営 ー大宮市立中学校長会ー
17	57	鈴木 勝 小川 辰雄	千葉・松戸四中 千葉・吾妻中		・東北へ修学旅行を実施して ー生徒のアンケートをもとにー ・生徒の自主プランによる修学旅行
18	58	岡野 久 青木 英	茨城・永山中 茨城・見川中		・連合による修学旅行の効果的なあり方を求めて ・生徒を生かし育てる修学旅行を目指して
19	59	◎高橋 哲夫 福原 昭 福本長治平	文部省教科調査官 群馬・中之条四中 群馬・富士見中		講演「修学旅行の今日的課題」 ・本郡修学旅行の現状と課題 ・よりよい修学旅行の在り方を求めて
20	60	◎高橋 哲夫 滝田 潔	文部省教科調査官 栃木・横川中		講演「自己教育力を育てる修学旅行」 ・修学旅行を通じての自己啓発
21	60	松本 三郎 片山 悦男	栃木・壬生中 栃木・宝木中		・本県修学旅行の現状と課題 ・よりよい修学旅行の在り方を求めて
22	61	西川裕二郎 村田小夜子	千葉・南行徳中 千葉・大洲中		・みちのくの修学旅行 ・修学旅行を省みて

回	年度	発表者	県・学校名	◎講師	研究内容・講演内容
23	62	小日向勝美 川上 次雄	埼玉・朝霞四中 埼玉・大宮第二東中		・洛中班自由行動による見学活動 ・自由性を生かした修学旅行
24	63	◎高橋 哲夫 宮本千代子 川上 徹 須藤 和彦	文部省教科調査官 茨城・土浦第六中 茨城・日立豊浦中 茨城・下館中		講演「学習指導要領改訂の方向について」 ・生徒自身の生徒の手による修学旅行 ・お互いを高め合うグループ別見学学習 ・生徒と教師がともに作り、触れ、感じる修学旅行
25	平成 元	＜群馬県厚生年金会館＞ ◎高橋 哲夫 後藤 秀夫 真庭 幹郎	文部省教科調査官 群馬・小野上中 群馬・沼田西中		講演「新学習指導要領に於ける特別活動」 ・達成感の充実を目指した修学旅行 ・体験的な班別学習を取り入れた修学旅行
26	2	＜ブラザインくろかみ＞ ◎渡辺 康隆 松岡美久子 大滝 伸一	栃木県教委副主幹 栃木・小山美田中 栃木・宇都宮国本中		講演「研究成果の確認と今後の課題」 ・主体性を育てる班別行動 ・あたらしい修学旅行の在り方を考える
27	3	＜志津コミュニティセンター＞ ◎渡部 邦雄 斎藤 正行 山田 守人	文部省教科調査官 千葉・国分台西中 千葉・柏五中		主題「集団の中で自己を生かし協力しあう修学旅行をもとめて」 講演「集団の中に自己を生かす修学旅行」 ・リーダー養成を中心にすえた修学旅行 ・班別にテーマをもつ修学旅行をつくるには
28	4	＜埼玉会館＞ 井桁 孝 大磯 宏 藤川喜久男	全修協修旅部長 埼玉・所沢富岡中 埼玉・狭山東中		主題「教育性を高める修学旅行をめざして」 提言「学校週五日制と修学旅行」 ・主体性を伸ばす班別行動 ・体験学習を通して生き方を学ぶ東北修学旅行
29	5	＜茨城県立青少年会館＞ 井桁 孝 秋田 昌彦 安島 一之	全修協修旅部長 茨城・五所ヶ丘中 茨城・赤塚中		主題「自主的に活動し、自ら学ぶ修学旅行」 提言「新学力を培う修学旅行」 ・生き方、在り方を学ぶ体験学習への援助指導の試み ・体験を通して自らの生き方を考える修学旅行への取り組み
30	6	＜ブラザインくろかみ＞ ◎大槻 達也 田上 富男 古田 真隆	文部省環境教育専門官 栃木・市貝中 栃木・豊郷中		主題「主体的に活動し、自ら学ぶ修学旅行」 講演「修学旅行における生徒の自主性」 ・三年間を見通し自ら学びとる力の育成を目指す修学旅行 ・研究テーマの設定を中心に生徒自らが計画した修学旅行の実践
31	7	＜群馬県生涯学習センター＞ ◎高橋 哲夫 今成 保治 田村 正紀	文教大学教授 群馬・渋川北中 群馬・池田中		主題「主体性を育てる修学旅行」 講演「これからの学校教育と修学旅行」 ・集団の行動力を高める修学旅行 ・主体性を育てる修学旅行の実践
32	8	＜市原市勤労会館＞ 鈴木 俊幸 眞野 義幸	千葉・土中 千葉・木刈中		主題「主体的に活動し、自ら学ぶ修学旅行」 ・自主性を育む修学旅行の取り組み ・生徒の自主性を高める修学旅行のあり方
33	9	＜浦和市民会館＞ ◎森嶋 昭伸 田村 俊明 金子 桂一	文部省初中局教科調査官 埼玉・鷺宮中 埼玉・鴻巣西中		主題「主体性を伸ばし、行動力を高める修学旅行」 講演「学校教育の転換と修学旅行への期待」 ・生徒の知恵と発想を大事にし、主体的に生きる力を育む修学旅行 ・自主的活動をめざした修学旅行
34	10	＜水戸市民会館＞ 岩原美智枝 坂入 秀範	茨城・日立坂本中 茨城・下館北中		主題「主体的に活動し自ら学ぶ修学旅行」 ・自ら学ぶ態度を育てる修学旅行をめざして ・主体的に活動し、実践力のある生徒を育てる修学旅行
35	11	＜ブラザインくろかみ＞ 高塩 博美 片川 慶子 三芝 直美	栃木・宮の原中 栃木・毛野中 〃		主題「生きる力」をそだてる修学旅行 ・体験学習を取り入れた修学旅行 ・自らの生き方を求める体験学習としての修学旅行
36	12	＜群馬県生涯学習センター＞ ◎森嶋 昭伸 高橋 隆雄 埴田 栄一 田中 充弘	文部省初中局教科調査官 群馬・新治中 群馬・長野原西中 〃		主題「生きる力」を育てる修学旅行 講演「これからの学校教育と修学旅行」 ・自主的に取り組む班別行動をめざした修学旅行 ・自ら学び、自ら考え、生き生きと活動する修学旅行 ー総合的な学習の時間を活用してー

回	年度	発表者 県・学校名 ◎講師	研究内容・講演内容
37	13	<アミューゼ柏> 田淵 実 佐藤 卓	主題 「生きる力を育てる修学旅行」 ・体験学習を取り入れた班別自主学習 ・自ら課題を発見し、自ら計画し、自ら検証する修学旅行を目指して ー修学旅行を総合的な学習と位置づけての実践ー
		千葉・西志津中 〃	
		池田 保 澁谷 善武	
		千葉・湖北台中 〃	
38	14	水戸 勝英 〃	主題 「みんなで創ろう21世紀の修学旅行」 ・自ら学び自ら考える力の育成を目指す修学旅行 ・総合的な学習の時間の視点から見た修学旅行
		<さいたま市民会館おおみや> 渡辺 勝徳	
		埼玉・神泉中 〃	
		関口 陽子 梅津 稔	
39	15	埼玉・南高麗中 〃	主題 「みんなで創ろう21世紀の修学旅行」 ・自己決定の場面を生かした修学旅行 ・体験的な学習を通して見つめなおす自分とふるさと再発見の旅
		<ブラザイン・くろかみ> 生田目 薫	
		栃木・国本中 〃	
		岩崎 昌美 田中 弘子	
40	16	栃木・栃木西中 〃	主題 「みんなで創ろう21世紀の修学旅行」 ・修学旅行における国際交流学習の一端 ー「Why don't you come to Suifu?」郷土紹介のガイドブックを携えてー ・集団づくり及び総合的な学習の時間の場としての修学旅行の在り方 ー中学校3か年の旅行・集団宿泊的行事の実践的取り組みを通してー
		佐藤 宏行 〃	
		<ホテルレイクビュー水戸> 棚井 義広	
		茨城・水府中 〃	
41	17	古内 勝己 一色三千男	主題 「修学旅行における『学び』の創造」 ・見て、聞いて、体験して発見する私だけの京都・奈良 ー体験的な活動を通して成長する生徒を目指してー ・生徒の自主的活動を育み伝統文化とふれあう修学旅行 ー総合的な学習の時間における実践的取り組みを通してー
		茨城・水戸第四中	
		<水上館> 小淵 誠	
		群馬・薄根中 〃	
42	18	須田 秀昭 栗原 和彦	主題 「修学旅行における『学び』の創造」 ・ふれあい、体験、大人から学ぶ山形の旅 ー3年間を見通したキャリア教育を核としてー ・日本文化探究をととした生徒の向上
		群馬・金島中	
		<流山市生涯学習センター> 根本 晃男	
		千葉・みつわ台中 〃	
43	19	平野 正春 村山 義則	主題 「子どもの未来を拓く修学旅行の役割の研究」 ・生きる力をはぐくむ修学旅行 ー体験学習を通して自分の将来・地域を見つめる旅ー ・過去・現在・未来、そして自分を見つめる修学旅行 ー総合的な学習の時間とリンクした実践的な取り組みを通してー
		千葉・南部中	
		<さいたま市民会館おおみや> 大倉 芳樹	
		埼玉・川口東中	
44	20	桜井 信雄 〃	主題 「感動ある修学旅行の実現」 ・学級団結をねらいとした旅行的行事の実施 ・結束力を高め、個が生きる修学旅行のあり方 ー絆を深める体験活動を取り入れた自分発見の旅ー
		埼玉・埼玉中	
		<ホテルレイクビュー水戸> 飯野 兼一	
		茨城・水戸五中 〃	
45	21	鈴木由香子 〃	主題 「感性をはぐくむ修学旅行の探究」 ・世界遺産の地で感性を磨く修学旅行のあり方 ークラス別茶会(京都・奈良)と献茶式(春日大社)をとおしてー ・心に響く修学旅行のあり方 ー平和への想いを歌声にのせてIN広島ー
		茨城・内原中	
		<小山市文化センター> 戸倉 文夫	
		栃木・上三川中 〃	
46	22	飯塚 雅美 元田 勝章	主題 「感性をはぐくむ修学旅行の探究」 講演 豊かな感性をはぐくむ修学旅行 ・伝統と文化を学ぶテーマ学習
		栃木・佐野西中 〃	
		<前橋テルサ> ◎児島 邦宏	
		東京学芸大学名誉教授 前橋・第五中	
47	23	瀬戸 満 〃	主題 「感性をはぐくむ修学旅行の展開」 ・キャリア教育をメインとする修学旅行の実践 ー30年以上に及ぶ会津地方との心の交流ー ・人との「ふれあい」をメインにおいた修学旅行
		<ホテルポートプラザちば> 足立 雅志	
		千葉・御滝中	
		波田地 馨 〃	
48	24	千葉・法田中	

緊急報告

第29回「全国修学旅行研究大会」に参加して（平成24年7月30日）

主催 公益財団法人 全国修学旅行研究協会

関東地区公立中学校修学旅行委員会

研究委員長 根岸 次郎

はじめに

歩くだけでも汗が噴き出てくる猛暑の中、全国修学旅行研究大会が、7月30日（月）午後1時からホテルグランドヒル市ヶ谷を会場に開催された。

今回の開催目的は、「修学旅行中の生徒の安全を確保し、無事に自宅に戻るよう支援する方策を提示し、参加者の理解を深めるとともに、各校のマニュアルの作成に供する。」である。

研究大会の中心は、パネル・プロポジションであった。

パネルプロポジションとは、パネルディスカッションに似た形式を採用するものの、一つの協議題について議論する形式ではなく、パネラーが自らの体験に基づき事例を紹介したりこれからの課題や対応策を提案したりする方法である。

パネラーは、次のとおりである。

① 文部科学省 スポーツ・青少年局学校健康教育課 安全教育調査官

② 前沖縄県立首里高等学校教頭（現在は、沖縄県内の公立高校に異動）

沖縄県立首里高等学校第2学年生徒323名の修学旅行引率責任者である。

2011年3月11日東日本大震災の発生時、東京近郊において班別自主活動を実施していた。

③ 修学旅行請負旅行者職員

上記の県立首里高等学校修学旅行の担当旅行者職員

④ 株式会社オリエンタルランド営業部長

⑤ スクールカウンセラー（東京都公立学校で勤務）

各パネラーの提案は、それぞれに示唆に富み、今後参考になる情報にあふれていた。残念ではあるが、ここで紹介できるのは、紙面の都合上、沖縄県立首里高校の修学旅行についての報告のみとする。

2011年3月11日14時46分、沖縄県立首里高等学校第2学年生徒323名は東京にいた！

沖縄県立首里高校の修学旅行は、例年、第2学年3月に実施している。実施方法は参加希望制である。今回は、在籍440名中323名の参加希望者を得て、北海道スキー教室を中心に修学旅行が実施された。スキー実習を終えた一行は北海道から東京に移動し、修学旅行最後の活動である東京近郊の班別自主活動に取り組んだ。その班別自主活動日が3月11日であった。

震災に見舞われた午後2時46分頃、生徒は班別という小グループではあるものの、学年や学級の拘束を解かれて東京近郊を中心に自由に行動していた。

引率責任者である教頭が、震災直後真っ先に取り組むことは生徒の安否確認であった。

次に取り組まねばならない課題は、参加生徒全員の安全を確保、無事に自宅に戻すことであった。

生徒が自宅に戻る飛行機は、翌日の3月12日14時40分羽田発である。300名を超える大集団の飛行機座席を確保することは困難で、この飛行機を乗り過ごすことはできなかった。

全参加生徒の安否確認は、2～3時間後に取れたたようである。午後5時05分、遠く離れた沖縄の地、首里高校で最終の確認がなされている。今後、対策本部は被災生徒を抱える東京ではなく、首里高

校となっていく。

その理由は、ほとんどの高校生が携帯電話を保持していたこと、沖縄に残る不参加生徒約100名がいたことであった。当時、東京近郊内同士の携帯電話は極めてかかりづらかったが、沖縄と東京間の通話はできたようである。また、電話は掛かりづらいがメールはつながったようでもある。PHSも有効であった。

同級生の安否を心配する修学旅行不参加生徒は沖縄から東京に盛んに通話した。その生徒間の通話を通して得られた情報（安否確認）が沖縄の首里高校で集約・整理され、東京の教頭に送られることになった。こうして、予想をはるかに上回る早い時刻に安否確認がなされた。

この際生じた課題は、東京近郊各所に散在する生徒がもつ携帯電話のバッテリー切れであった。また、沖縄においては、首里高校に掛かってくる保護者の問い合わせ電話で、2本しかない学校の回線を塞（ふさ）ぐことであった。そこで、保護者にはホームページを見るよう指示するとともに、保護者問い合わせ用の電話窓口をPTA役員に請け負っていただいたようである。また、生徒間の電話もやめるよう説得し、生徒には、学校へ直接問い合わせるよう指示した。

非常時にあって、通信アイテム（回線・手段）を有効に利用する条件は「情報の一本化と組織化が重要である」ことを、強く印象付ける報告であった。また、誤報への適切な対処も欠かせぬ非常時対応であることも知らされた。

次に、安否確認後の引率責任者の使命は、翌日の14時40分羽田発の飛行機に一人残さず生徒を搭乗させることであった。

まず引率責任者がとりかかったことは、小グループで行動している生徒集団をできるだけ大きなグループにすることであった。グループの代表者にそれぞれ集合場所を指示していった。この際、最大の生徒避難場所は青山学院大学となったそうで、最終的に95名の生徒が集結している。ただし、11日の夕方から夜間にかけて、周知のとおり電車・バスは止まる。大渋滞でタクシーは動かない。合わせて、電話が極めてかかりづらい。さらに、東京が初めての者が圧倒的で、地理感覚がない。こうした大きなハンデを背負いながら、引率責任者である教頭は生徒掌握に努めていった。

修学旅行生徒が旅行地の避難場所を活用する場合、思いもよらぬ課題がある。それは、公立小中学校等の地域住民のための避難場所では、他地域の住民の利用を断わるということである。他県の学生を受け入れる余裕もなければ、予定もないということのようである。このことから、避難する場所も限られることになる。

必死の努力の結果、翌日の午前3時30分、全ての生徒の避難場所が確認された。

引率者は、旅行業者と連絡を取り、羽田に生徒を集結させるための避難場所巡回バスの手配に取り掛かる。担当した旅行業者も、全力を挙げてバスの配車に尽力する。そして、震災が発生して約24時間後の3月12日午後2時40分、修学旅行に参加した首里高校第2学年の生徒全員が羽田に集合した。彼等は予定の飛行機に搭乗することができ、無事沖縄の帰路に着いた。この際、避難場所から直接に羽田に向かわざるを得ない状況にあり、ホテルに残された生徒の荷物の回収にも時間を要している。

研究大会終了後の懇親会の折りに、教頭先生と直接お話する機会を得た。そこで、「思いのほか、生徒はしっかりしている（していた）。」という報告を伺い、ホッとした。教頭先生の話しぶりからは、「日ごろの首里高校の教育の成果であるに違いない」と、直感した。

はたして、自校の生徒はどう対処できるだろうか。冷静に判断する力、粘り強く困難に耐える力、非常時の中における周囲への労わりなど、本校生徒はどれほど身に付けているだろうか、考えるだけで汗の吹き出る熱い一日であった。